Ⅵ　その他の発掘調査

平城宮西面大垣外の調査(第９８－１１)　建物増築にともなう発掘調査。西面大垣の西方約５０ｍ、西面北門前の条間路南側溝の遺構が予想された。敷地の南よりに東西４ｍ、南北７ｍのトレンチを設け２８.０㎡を調査した。

調査地の土層は、厚さ1.0ｍ内外の黄色粘土の盛土、旧表土(厚さ25㎝)、灰黄色砂質土(厚さ１５㎝)とつづき、灰紫色粘質土になると奈良時代の遺構面である。検出遺構は柱穴２であり、２.１ｍをへだてて南北にならぶ。トレンチが南に片寄ったためか、目的の南側溝を検出するに至らなかった。

下水道管理設工事にともなう調査(第９８－１４)　奈良県浄化センター建設事務所に協力し、下水道管理設工事にともなう調査を行った。

唐招提寺南門の東方、県道奈良・大和郡山・斑鳩線沿いの東側において、西一坊大路東側側溝を確かめる調査を行う。(次数外、1976年１０月１９日～２８日)

検出した遺構は柱穴２および土壙数カ所である。目的としていた西一坊大路東側溝は、発掘区内では検出されなかった。

発掘区内の地山は黄緑色の粘土で、その上層には瓦器・瓦片を混えた暗灰色の粘土が、厚さ４０㎝から１ｍにわたって堆積していた。暗灰色粘土の上層は水田耕作時の床土と耕土で、さらにその上に近年の造成による盛土がなされていた。

地山は南へむかって大きな傾斜をもち、そのうえ激しい凹凸があった。地山の絶対高は海抜５８.９ｍから海抜５９.６ｍである。

柱穴２は発掘区北西部の地山の比較的高い部分で東西に並んで検出された。西方は発掘区外となり、東方は地山の削平が甚しいため未検出で、遺構の性格をつかむまでには至らなかった。遺構の時期についても不明であるが、上述の粘土の推積より下層で検出されたので、中世を降ることはないと考えられる。もしこの遺構が奈良時代のものであるとすれば、左京五条一坊三坪の遺構ということになり、大路側溝は発掘区よりさらに西側の県道下に想定されよう。

土壙は発掘区全域にわたり、埋土に含まれる遺物は主として瓦器と瓦片である。

瓦の総量はセメント袋で一袋である。このうち年代の判明する瓦で奈良時代のものは、平城宮の６２３６型式一点で、他は一般の丸・平瓦である。

土器の総量は平箱に２ケースで、その大半が中世にぞくする瓦器で占められる。それらは鉢・皿の類で、ほとんどが破片であるが、保存がよく、１２世紀頃の瓦器の良好な資料である。

１９７７年１月から３月の間に、３次に亘って奈良県立奈良病院関連下水道管渠築造工事にともなう事前調査をおこなった。

a)　第１次調査として、１月１９日から２６日まで、奈良市五条町内に設定された発進坑No.３および到達坑No.４の２個所で発掘調査をした。両地点は唐招提寺南門に南接して東西に走る市道敷上に位置し、それぞれ南門心から約１１４ｍ、５２ｍ東にあたる。

立坑は東西6.5ｍ、南北3.5ｍほどの長方形で、四壁には長さ７～１１ｍの鉄製パイルを打ちこみ、バックフォーで旧水田床土と思われる青灰色粘質土面まで掘削・排土し、その後手掘りによる発掘調査をおこなった。

検出した遺構は、No.３、No.４ともに、近世および中世の東西溝各１条ずつである。これら東西溝は、その振れと両地点間の距離から考えると、各々が同一の溝である可能性が強い。本地点は平城京条坊における五条条間路の北側溝に該当する位置と考えられたのであるが、残念ながら奈良時代の遺構は検出できなかった。しかしながら、これら中・近世の溝が京の条坊を踏襲したものであった可能性は残る。ちなみに、中世の溝心は国土調査法第６座標系Ｘ－１４７３４５.５００ｍ前後を通るが、この値に朱雀大路の振れＮ１５′４１″Ｗを考慮するとＸ－１４７３３９.３００ｍ前後となり、平城宮第３９次調査で得た二条条間大路心の座標Ｘ－１４５７５１.９７７との差は約１５８７ｍとなる。五条条間路の側溝心心距離を４丈（１２ｍ）とみれば、両条間路心間の距離は１５８７＋６＝１５９３ｍとなり、３条分の距離（１８００尺×0.２９５ｍ×３＝１５９３ｍ）とぴったり一致するのである。

なお、No.４地点の近世溝内には大量の瓦が落ちこんでいた。いずれも瓦当面を

南に向けており、北に位置する建物からずり落ちたような状態であった。近世時には、溝の北側に唐招提寺と関連する築地のような構築物があったものと解し得る。

出土した遺物は、近世のものを主に、中世期のものを混じえ、若干の奈良・平安時代に属するものがある。瓦類はその量極めて多く、総量平箱２５杯分ある。近世瓦の中には特殊な刻印を有するもの２０種７６点が含まれていた。土器類の量は相対的に少なく平箱１杯程度、大部分が瓦器である。特殊な遺物として瓦質の火舎が挙げられる。No.３地点の中世溝最下層から出土したもので、鎌倉時代の作と考えられる。

b)　１９７７年２月２２・２３の両日、平松町内で第２次調査を実施した。調査地点は県立病院建設地の東南１００ｍほどの位置にあたる農道上である。当該地は水田畦畔の遺存状況から、また平城宮第１００次調査で検出した大路跡の北延長線上にあたるので、平城京右京三坊大路西側溝の存在が予測された。南北農道上で１０個、東西道上に２個の６０×１００cmほどのグリッドを設定し、南から１～１２と名づけて調査を進めた。５・１０地点を道幅いっぱいに拡大、また１１地点を東西に拡げた結果、これら３地点で３層に重複した南北溝各１条を検出した。これらの溝はほとんど遺物を含まず、ただ１０地点の中層溝から中世期の瓦片数片を得たのみである。したがって、各々の溝の年代決定は困難であるが、下層溝が三坊大路西側溝である可能性は残る。

c)　１９７７年３月２５日から３０日まで、第３次調査を平松町内で実施した。調査地は垂仁天皇陵古墳の西南約２００ｍ付近で、平城京条坊における二坊坊間の坪境小路に相当する位置と推定された。

下水管埋設用の掘削と併行して調査を進行した。現地表から1.5ｍほどまでは山砂による盛土で、盛土の下層は旧池の堆積土と思われる黒褐色粘質土（厚さ３０cm内外）とその下部の灰色砂（厚さ２０cmほど）が占め、さらにその下に厚さ５０～７０cm程度の青灰色砂質土層がある。以下は青灰砂の地山である。池の堆積土以下で断面観察をおこなったが、何らの遺構も存在せず、遺物の包含も認め

られなかった。

西大寺本坊の調査(第９８－１６)　１９７７年1月２６日と２７日の２日間、西大寺本坊内において、事務所改築にともなう事前調査を実施した。

調査地は、西大寺中大門推定地の南東約２０ｍの地点で、すぐ北に接して１９７５年１０月に同調査部が行った中大門推定地の調査では、西大寺造営以前の平城京条坊区画を示す一条条間小路の南北両側溝が検出されていた。

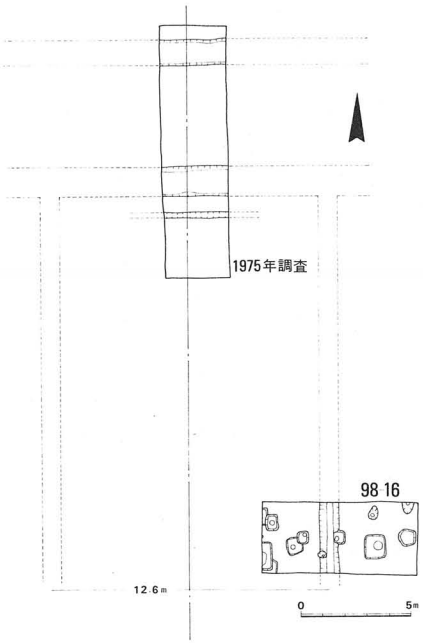
今回の調査では、南北3.３ｍ、東西7.１ｍの東西方向のトレンチを設定し、現地表下約８０㎝の地山面で、奈良時代に属する南北溝１条、柱穴１５ケ所を検出した。地山面から上には約３回の整地面があり、それぞれ、室町時代、江戸時代、現代の整地面と考えられるが、これらの整地面では明確な遺構はなく、わずかに江戸時代の整地面に赤く焼けた焼土面が認められただけである。

遺構としては南北溝と柱穴がある。南北溝は、上端幅９０㎝、下底幅３０㎝、深さ２０㎝の浅い素掘りの溝で、溝埋土中から奈良時代の丸・平瓦、土師器・須恵器が少量出土した。

柱穴は１５ケ所を検出した。小規模のものもあるが、一辺１ｍをこえる大形の掘形もある。調査面積が少ないために建物ないし柵としてまとめることはできないが、柱穴規模からみて、相応の規模の建物群であったと推定される。柱穴の重複関係から少なくとも２時期ないし３時期の建て替えがある。また、層位的には、柱穴群より南北溝が新しいことが確認できた。

南北溝や柱穴の柱抜取穴から、奈良時代に属する土師器・須恵器・瓦類が少量出土した。いずれも遺存状態が悪く、小片である。

このような遺構は、西大寺造営以前に形成



第15図　第98－16次調査遺構図

された住宅地にともなう可能性が大である。

法隆寺本坊西方地域発掘調査　この調査は、法隆寺寺務所新営計画にもとづく現状変更事前調査である。発掘地は、寺務所西側で大湯屋のすぐ南にあたる空地と、雑舎が存在する地域である。既存建物解体の関係から２次にわけて調査を実施した。発掘調査面積は６６４㎡である。

土層はおおむね単純な堆積状況を示しており、約２０cm～４０cmの表土層（黒褐色腐食土）直下は中世の瓦片や土器片を包含する黄褐色粘質土が約４０cm～６０cm堆積している。これは単一層ではあるが、西方では細砂を含んでいる。黄褐色粘質土の下層は、暗灰色粘質土層である。この層には古代から中世にわたる瓦及び土器片がわずかに包含されている。最下層は青灰色粘土であり、これは地山である。

建設予定地西半部の調査では、黄褐色粘質土面でも、暗褐色粘質土面でも、また地山面である青灰色粘土面においても何らの遺構も検出できなかった。東半部においては、地山面が比較的高く残っている。しかし、南にいくにしたがって次第に地山面は下降し、その上層は数度にわたる整地土が堆積している。これらのいずれの堆積土中にも近世の遺物が含まれており、しばしば大きく撹乱されることのあったことが知られた。今回の調査で注目すべきは、幅約２ｍの南北溝を検出したことである。この溝は、大湯屋の東方約１０ｍの位置を南流するものであるが、大湯屋の南端から約１２ｍの位置で終結する。そして、これは幅約５ｍの東西溝に接続する形となっている。溝から出土する遺物の中には近世に属するものも含まれているが、大湯屋の廃水を処理する施設であるとともに、大湯屋を区画する溝となる可能性も認められる。この他の遺構としては、長径約３ｍ、短径約２ｍ程度の池の一部を検出した。岸辺部に人頭大の石がいくつか残っており、底に小石を敷いているが、残存状況はさほど良好ではない。小規模なものである。